

# 最近のワクチン効果 — test-negative case-control design —

高宮 光 TAKAMIYA Hikari/高宮小児科院長

迅速診断キットを用いて test-negative case-control design (迅速診断陽性を症例、陰性を対照とした症例対照研究)にてインフルエンザワクチンの有効率を2シーズンにわたって調査したので報告する。1回接種群と2回接種群に分け、1回接種群はさらに前季接種群と未接種群に分けてそれぞれの有効率も検討した。今後は、この方法でワクチンの効果を判定することになると思われるので、調査対象や規定項目などを全国で統一することが急務である。

## KEY WORDS

- ・インフルエンザワクチン
- ・有効率
- ・test-negative case-control design
- ・迅速診断

## はじめに

ここ数年、欧米ではインフルエンザワクチンの有効率を test-negative case-control design で調査している。そしてその結果をシーズン早期に発表し、有効率が高い場合にはワクチン接種の勧奨を、有効率が低い時には予防投薬の考慮を呼び掛けている。2013/2014年シーズンから本邦でもこの方法による有効率の調査報告が散見されるが、調査規定は統一されていないのが現状である<sup>1)-3)</sup>。神奈川県小児科医会の幹事有志が2012年に立ち上げた神奈川県予防接種推進協議会では迅速診断キットを用いて test-negative case-control design (迅速診断陽性を症例、陰性を

対照とした症例対照研究)にて2014/2015年シーズン(以下前季とする)と2015/2016年シーズン(以下今季とする)のワクチンの有効率を調査したので報告する。

## 1 対象と方法

対象は前季に神奈川県内11市の16医療機関(神奈川県予防接種推進協議会会員)をインフルエンザ様疾患で受診し、迅速診断を行った患者(6カ月～89歳)で、ワクチン接種歴が判明している者とした。前季の流行はほとんどがA香港型であったので、B型22例を除くA型3,282例、陰性2,738例の計6,020例を対象とした。両群の接

種、未接種の割合は図1のごとくであった。

今季の対象は神奈川県内11市の18医療機関(神奈川県予防接種推進協議会会員)をインフルエンザ様疾患で受診し、迅速診断を行った患者(6カ月～82歳)で、ワクチン接種歴が判明している者とした。A型2,507例で、B型1,992例、陰性3,270例の計7,769例を対象とした。各群の接種、未接種の割合は図2のごとくであった。

臨床症状だけによる診断は除外した。なお、迅速診断キットは統一していない。流行開始は県内でも各市によって異なるため、各市内のインフルエンザ定点あたり1.0以上をその地域の流行開始時期とし、調査開始時期とした。経過時間によっては発症日に迅速診断